

成人後の学習とそのプランづくり

—市民的生涯学習論のすすめ—

北原罔彦

1. はじめに

(1) 問題の所在と背景

古代中国の「戦国策」に見える「隗より始めよ」は「遠大な事をするには手近なことから始めよ」が原義だが、現在では多く「事を始めるにはまず自分自身が着手せよ」の意に用いられる。¹⁾ 日本では児童青少年の読書離れが話題となり、子どもの読書活動の推進に関する法律ができて久しい。公立図書館サービスの原点ともいべきこの読書の問題について、図書館学や司書課程教育は履修生にどのような指導を行なっているだろうか。故事が示唆するように「まず自分自身が着手せよ」と教えているだろうか。高校時代までの読書量について尋ねたり、司書と呼ばれるに相応しい訓練などを行なっているだろうか。それとも法律などを紹介し、その意義を説くだけだろうか。司書資格を取得した学生の大学卒業後の読書は、司書課程に縁のなかった学生と比べてより充実する傾向にあると言えるだろうか。

読書離れが指摘される若年世代と大学生との間にさほどの年齢差がないことを思えば、司書課程教育においても常に読書というものを意識した教育が必要である。将来、彼らが「司書の不読書」と陰口をたたかれるようなことが万に一つもあってはならない。司書課程にも、図書館学や司書課程教育に携わる者にも、そうならないための教育的配慮が求められる。そうでなければ、この課程が「児童サービス論」や「図書館サービス概論」を講じる意味合いは怪しくなり、課程自体の存在意義まで色あせてしまう。

また 1996 年に「生涯学習概論」が司書課程の必修科目に加えられたことを直視すれば、この問題は「司書の不読書」を超えた遙かに大きな意味合いを有するものであることに気づく。今や司書は生涯学習の意義を知ればよいというだけの存在でも、それを市民に図書館のカウンターを通して伝えれば済むというだけの存在でもなく、みずから先頭に立って実践する存在となることが期待されている。²⁾

とは言え現在の生涯学習論の関心は、もっぱら地域における住民の生涯学習支援に集中している。もっぱら行政の側に立って、住民や住民グループの学習意識が高まり学習の振興が図られるよう、そのための計画や計画づくりなどに関心が偏っている。³⁾ 学習者一人ひとりの視点に立って何をどうすればよいか、どんな学習が可能なのか、どんな準備が要するのかといった解説をしてくれるものが見あたらない。一人の人間として生涯学習とどう向き合うのか、司書であるかどうかを問わず、老若・年齢・境遇を問わず、学習というものをどう考えどう取り組みばよいか、その手引きをしてくれるものが見あたらない。

2006 年 3 月に公表された日本図書館情報学会による LIPER 報告書の改革案は、司書課程について「ラジカルな変革の必要性を確認することができず、今回は司書になるために学ぶべき領域について提言することにとどめた。むしろ、司書課程で学ぶ内容とそのレベルを、最新の図書館情報学の研究成果をもとにした高度なものに高める努力をすることの方が重要と考えられた」⁴⁾と述べている。だが提言された科目の内容を見る限り、生涯学習は地方自治や住民運動やボランティア活動や町おこしなどと並ぶ「図書館が置かれた地域社会全般」に関する事柄の一つでしかない。現行の「生涯学習概論」を超えるどころか、その水準を「高度なものに高める努力を」

した跡さえなく、単なる「基本的理解」の水準に止まっている。⁵⁾

こうした背景にあるのは生涯学習に関する研究を「最新の図書館情報学の研究成果」に含めようとし、ない集合的無意識の影である。同学会の関心が及ばないことを示しているにすぎない。生涯学習論は日本の公立図書館の発展、ひいては司書という職業の発展やその社会的地位の向上にとって決して埒外なテーマではない。司書課程において生涯学習論を学ぶ意義の第一は、大学卒業後の人生をよりよく生きるためにはどうすればよいか、よりよく生きることと生涯学習がどこでどう結びつくのかを履修者自身が先ず自分の問題として把握し理解することにある。なぜならそうやって初めて他人にも法を説けるし、公立図書館が市民の生涯学習に欠かせない枢要な施設であるとの確信も生まれてくるからである。

(2) 本稿の目的

本稿は以上の認識に基づき、成人した市民が十分な計画の下に学習を進めることの意義を先ず明らかにする。また、実際の学習プランづくりに欠かせない生涯プランなどの諸条件の内容とその意義についても明らかにしてゆく。社会のためでも集団のためでもない成人した市民一人ひとりのための生涯学習というものを、市民に対していかに説明し実践を促してゆくか。そのために関係者には何が求められるか。これが本稿のテーマであり、副題を「市民的生涯学習論のすすめ」とした理由でもある。

二十歳という人生の節目を通過したばかりの世代にとって、学習プランづくりに取り組むことの意義は小さくない。ひたすら司書を目指して進む学生にとっても、多少の回り道はしても司書になろうとする学生にとっても、将来のある時点で図書館の仕事をしてみたいと願っている学生にとっても、とりあえず資格だけ取ろうと考えている学生にとっても、これらの課題に挑戦するとなれば、いままでの人生では経験したことのない新しい作業をいくつも積み重ねなければならない。そして、いずれ遭遇するであろうさまざまな場面や局面と向き合い、一つひとつ乗り越え、さらにその先の人生へとつなげてゆく地道な作業をこなさなければならない。先ずどのような場面や局面を想定するか、次はそれらとどう向き合い、切りぬけ、切りひらき、充実させてゆくか他人事でなく自分自身の問題として考えなければならない。これらの作業に必要な情報や知識はどのようにして手に入れるか、そのためには何を学ばばよいのかなど多くの難問や課題が立ちはだかる。

なおキャリアプランの例示に資料や情報に縁の深い職場を用いたが、この問題は決して司書課程や図書館学に止まるものでないことを強調したい。一方、指導に当る側から見れば、この試みは「成人を対象とした教育から成人の特性を活かした学習援助へ」⁶⁾というアンドラゴジーの流れを加速させるための実践である。図書館情報学においても研究の細分化は避けられそうにないが、指導や教育における総合化を怠っては人材の育成も真の学術研究発展も望めない。そのこともまた本稿が意図するテーマの一つである。

2. 成人後の学習の意義

(1) 成人後の学習の意義と特徴

成人後の学習は、何よりも対象となる世代の年齢の幅が極めて広いことに大きな特徴がある。年齢の幅が広いため、学習の目的や動機に範囲や制限を設ける理由も必要も少なく、学習の始期・終期・間隔、方法・手段などいずれの選択も全て当人の自由な意思に委ねるのが最も現実的な方法である。仮に第三者による勧奨などがあったとしても、それによって学習を始めるかどうかの最終的な判断は全て当人の意思に任されることになる。強制が学習に相応しくないものであることは幼少期の学習も成人後の学習も何ら差がない。

しかし学習のための動機となると、この世代は実に多くの動機の種や芽に囲まれて生活している。二十歳過ぎの学生であれば成人したがゆえの自立の問題に直面するし、結婚を考える年代には将来の家庭生活や生計の維持に向けた多くの課題が立ちはだかる。就職や結婚を前に、これらが動機となって自立や将来に向けて備えるための学習を始める人も少なくない。自立とは「親もとを離れて自立する」といった表現からもうかがわれるように、他の助けや支配なしに自分一人の力で物事を行うことである。自立を妨げるものは親の支援であり、他者による支配である。支援や支配の内容はさまざまだが、仕送りなどの経済的な支援の果たす役割が大きい。これに

より精神的な自立が遅れてしまうといった負の側面も見逃せない。学生であれば親から自立するための経済や生活面の学習が欠かせないし、就職しても失職しない程度の学習は最低でも続けなければならない。

リカレント教育は研修を企画し実行する側から見た呼称である。だがこれを社員や職員の側から見ればやむを得ざる学習という側面も含まれる。職場や仕事の確保のために仕方なく受講する人がいる一方で、より積極的に職業人としての能力向上や人格の完成をめざして計画的に取り組む人も少なくない。傍目には同じ学習と映っても、取り組む人たちの動機や意思の強弱はいろいろである。実際 1980 年代にはこうした学習がもてはやされ、ほとんど生涯学習と同義のように喧伝された。⁷⁾ 大学によっては今も夜間コースを設けたり、一般学生とは別に社会人枠を設けて入試を行なうところが見られる。⁸⁾

成人後の学習には夢の実現、自分らしさの追求、自己啓発、職場における処遇の改善、社会における地位の向上、生活の質的改善など、人生をよりよく前向きに生きようとして行なうものが多い。幼少年期の学習に見られるような好奇心に代表される「知りたい」「何だろう」といった衝動に突き動かされて始まる学習もなくはないが、そうした気持を維持することは年齢が増すにつれて徐々に難しくなる。そして逆に、よりよく生きたいとか生活を充実させたいという気持が増してきて、これが学習の動機になってゆく。よりよく生きたいと願う気持は学習を進めるための源泉である。その強さは学習を進める際の推進力となる。常にこうした前向きな気持が維持され、よりよく生きたいと願う気持が持続していれば年齢に関係なく何歳になっても学ぶことができる。しかも学習の範囲に指定や制限がないから、興味や関心事や空き時間など自己の都合に合わせて自由に選ぶことができる。これが、学ぶことに定年も年齢制限もないと言われるゆえんである。

一部の論文⁹⁾に見られる、学習の目的や動機を「人生を再構築しようとする創造的な意欲」と考える「人生再構築」の視点は適切なものではない。こうした視点は生涯学習の範囲をある年齢以上の限られた世代に狭める役割しか果たさない。例えば学部の卒業を控えた学生が今後の進路についてあれこれ悩み考え抜いた末に多くの友人とは異なる、就職でも進学でもない第三の道を選択したとしよう。そうした道に向かい備えるための学習も優れて生涯学習の範疇にある。だが学生のこうした学習や活動をもって人生の再構築と呼ぶ人はいない。「再構築」では「やり直し」や「巻き返し」の意味合いが強すぎる。自分の選択を「やり直し」や「巻き返し」と考えるかどうかは本人が決める問題である。端があれこれ口を挟むことではない。

(2) 学習の継続と学習プランの役割

現在、日本で広く「生涯学習」と呼ばれるようになった言葉・概念をたどってゆくと 1965 年 12 月にパリのユネスコ本部で開かれた第 3 回世界成人教育推進国際委員会の会議に行き着く。このときユネスコ成人教育課長 Paul Lengrand が提唱したのは、“l'education permanente” と呼ばれた概念である。フランス語より英語に馴染みの深い日本ではもっぱら “lifelong education” を使うようになったが、これは Lengrand の概念を英語に置き換えたものに過ぎず、両者は基本的に同一の言葉・概念である。

Lengrand のフランス語にそのまま仏和辞典風の対訳を付ければ「恒久」か「永久」という語が当てはまる。“permanente” の語義は「いついつまでと、あらかじめ終期を決めておくのではなく」である。この場合の終期とは人生最期の意であり、決めるというより決められない、誰にもいつか必ず訪れるものだがそれがいつであるかは誰も分らない、そういう時期を指している。つまり「生きている限り学ぼう、学び続けよう」ということである。これが学習継続の意味であり、継続が言われることの背景でもある。

ヒトは生きていれば必ず外界の刺激を受容することになる。世代により、環境や境遇により、その時々的心情により感知する刺激はさまざまに変わるかも知れない。だが人間であればその刺激の中から必ず学ぶものがあるはずだ。だから刺激感知のアンテナが錆びないように、方向が意に反して偏らないように常に心がけていよう。できることなら受け身ではなく、積極的にアンテナを磨き、刺激の方向も種類もしっかり選んで受容に努めよう。自分から探し求め、計画を立てて受容しよう。そうすれば何を学ぶか、何のために学ぶかじっくり検討できるし、何より着実な学習が実行できる。着実に進めることができれば、さらに深く学ぶことも期待できる。逆に計画も立てず、目に見える形のプランもつくらなければ、せつかくの計画がどこまで進んだのか、どこで止まっているのか、足踏みしているのか、何を学び何を学び残しているのか、どれもみな曖昧になってしまう。そうな

らないためには記録されたプランが欲しい。

これが学習プランを立てることの意義である。学習に初級、中級、上級などの順序や難易度がある場合はもちろん、相互に関係のあるテーマを学習する場合も特にこうした計画が重要となる。海外旅行のような多額の費用を要するものは資金計画と連動させることで実行をより確実なものにしてゆける。また遠大なテーマへの挑戦を考える場合はあれこれテーマを探す時間が必要であるし、そのための学習も早めにおきたい。こうしたことを逐一検討し、時系列に並べ、図や表で示し、必要な注記を加えると学習プランはできあがる。

3. 前提となる生涯プランの作成

(1) 生涯プランの意義と内容

学習プランの内容は人それぞれである。決して、こうでなければならないとか、こうあるべきだというようなものではない。どのような学習プランになるかを決めるのは、その人の人生そのものである。その人がどのような人生を歩みたいと考えるかによって、学習プランもまた変わってくる。だから学習プランの作成には、その人のこれからの生き方を示す生涯プランが欠かせない。

生涯プランの起点は現在の自分である。現在を起点に夢や理想や自分らしさについて考え、それらを分かりやすく綴ることが生涯プランの目的である。生涯プランにはまた人生の節目となる事柄の記述も必要である。女性の場合は妊娠や出産についての専門医の意見にも耳を傾けたい。¹⁰⁾ それらを列挙し、前提として欠かせない諸条件が見つければ、そうしたことの実現にも努力しなければならない。

特に成人したばかりの学生にとって自活は自立への第一歩である。まず生活費用全般を自力で賄うための収入を確保しなければならない。就職はそのための手段となる。就職を自活の手段と割り切ることができれば自立の先に、職業とは異なる別の世界を展望することも可能になる。しかしそのためには本来の自分を取り戻すことのできる世界が用意されていなければならない。生涯プランにはこうしたことの詳細、人生の目標、目標に向かうための過程を書き入れておく。

一方、就職を自己実現の機会とする考え方もある。特定の職業などに就くことを目標に進学し、必要な専門資格の取得を目指している学生がこれに該当する。だがその場合でも、資格を取り職に就いたあとの目標を考えておかないと躓くことになる。医師免許の取得がたとえ親の医院を継ぐためであっても、その先に何も目指すものがないのでは何のために生きているか分からなくなってしまう。自己というものが曖昧になり、医師という職業名やその免許証名だけの存在になってしまう。医師には医院の開業など医業を独占できる排他的な権限が与えられる一方で、社会的法的な義務と責任が数多く規定されている。¹¹⁾ 権限の裏には必ず義務や責任があり、両者の均衡の上に社会的な待遇や処遇も定まるのが常である。せっかく医師国家試験に合格しても、こうした重圧に耐えるだけの展望がもてなければ医業をなすことは難しい。

生涯プランに必要なのは自立や自己実現の過程だけではない。起点となる現在の自分についての分析や記述がまず必要である。夢も理想も目標もそれらを抱くに至った過程が必ずあり、背景や事情がある。それらを改めて振り返ることで将来の夢や目標をより具体的なもの、強固なものにしてゆくことができる。また夢や目標と現在の自分との距離も、おのずと明らかになる。大きな夢や理想であればあるほど、こうした作業を綿密に行ない、そうしたものに憧れたり希求する意思の強さ・確かさを確認しておく作業が大事になる。文部科学省が2012年8月に発表した「平成24年度学校基本調査」(速報値)は同年春に大学を卒業した約56万人のうち就職も進学もせず無職となった8万6千人の中に就職準備中(57.1%)でも進学準備中(4.2%)でもない者が38.8%いることを明らかにした。¹²⁾ 数にして3万3千人余りとなるが、これらの中に前章で述べた第三の道を選択した学生がどれくらい含まれるか、それとも生涯プランらしきものを全くもたない人々なのか大変気になる。

(2) キャリアプランの意義と内容

生計を維持しながら仕事を通じて自己実現を図るためには、どのような職業を選択し、その中でどのように力を発揮してゆくか、昇進や昇格だけでなく異動や転勤や配置転換や出向といった問題も含めて自分なりの将来を

考えてみる必要がある。その際、予測されるリスクに対しては一定の備えも必要である。特に仕事を通じて自己実現を図りたいと願う場合は、目標実現に必要な事柄を列挙し、それらの着実な実行を進めることができるし、直接仕事に関わる事柄でなくても人間性を磨いてゆくことができる。そうすることで、仕事を通じて知り合った人々にも尊敬されるし、仕事を離れてもつき合うことのできる人間関係の構築にもつながる。以下、司書課程を履修中の学生の場合を例にして、資料や情報に縁の深い職場でのキャリアプランにはどのような視点が必要かを見てゆく。

最も一般的なのが図書館法に沿った公立図書館を職場とするコースである。最初から図書館の専門職員として採用される場合もあるが、地方自治体の職員として採用され、首長部局ではなく教育委員会事務局に配属されて、後に図書館勤務となる場合もあり得る。いずれにしても公務員試験に合格することが求められる。ほかにも指定管理者として公立図書館の運営管理を行なっている民間企業に就職する方法もある。この場合は異なる自治体で公立図書館の運営を経験できる可能性も生まれるが、同時に転勤の覚悟も必要になる。

大学図書館の場合は国立大学法人の大学の附属図書館へ就職する方法、私立大学の図書館へ就職する方法、公立大学法人の大学の附属図書館へ就職する方法などがある。その際、大学によっては医学や化学などの主題専門知識、語学力、古文書解読能力などを要する場合もあるので学習プランには特に留意したい。国立大学法人の大学の附属図書館では各地の大学で図書館勤務を経験することになるため転勤が避けられない。

また民間企業や各種研究機関や業界団体などの情報資料室に勤務して資料や情報の仕事に携わる方法もある。図書館界で専門図書館と呼ばれる世界への就職がこれにあたる。採用方法が様ではないため「専門図書館」や「図書館雑誌」などの募集欄にこまめに目を通し、採用情報の把握に努める必要がある。

ほかにも小中学校や高校の図書室で学校図書館の仕事に携わる事務職員の道がある。多く学校司書などと通称で呼ばれる仕事だが、自治体により採用後の身分は大きく異なる。利用者が基本的に児童生徒である点にも注意したい。採用数は多くないが国立国会図書館でも毎年、定期的に職員の補充を行なっている。国会図書館は他の図書館に比べて職員数が多く庶務や会計など一般の業務も含まれるから、どんな業務もこなす気概が要る。

どの道を選ぶにせよ、日頃のキャリアアップが欠かせない。まずは日本図書館協会など仕事や職場と縁の深い職能団体に加入し、日常業務の遂行に必要な技術情報や新製品情報などの入手に不足が生じないよう万全を期すこと、各種研修情報や研修の機会に目を配り積極的に受講して大学で学んだことが錆び付かないよう、古びないよう努力すること、さらに研究会や学会にも所属して専門的な技能の研鑽に努めることが望まれる。

これとは別に図書館の種類や利用者のニーズに応じた、その図書館ならではのさまざまな学習や研鑽や読書が必要になることを忘れてはならない。公立図書館であれば地方公務員に必須の法令規則の学習や予算編成の知識が欠かせないし、地域の現状を知るだけでなく地方史や地域資料の学習も必要になる。最近では資料としての風景写真（紙焼き）の価値が見直され、関係機関による連絡協議会がつくられ、劣化対策や保存活用を進めるための研究会や研修会も開かれており、¹³⁾ 広く関連分野の最新動向にも目を配る余裕が必要である。児童サービスや青少年向けサービスには絵本や児童書などの幅広い読書が欠かせないし、特に古典的な作品は早めに読み終えていないと仕事にならない。こうした点を踏まえ、職業人としての誇りがもてる学習プランを立てること、そして着実に実行してゆくことが何よりも公立図書館員には求められている。

(3) 生きがいプランの意義と内容

生きがいは「生きていることの喜びや幸福感」を表す語だが、否定的な意味合いに使われると「生きるに値するだけの価値」をいう言葉へと微妙に変化する。¹⁴⁾ 同じ言葉でも順風満帆な人生や比較的波乱の少ない人生を送る人、常に前向きに生きている人、懸命に生きようとしている人には前者の意で使われ、仕事で躓いたり身内の不幸が重なったりして気持ちが鬱んでいる人には後者の意味合いで使われることが多くなる。つまり生きがいは生きることの価値や張り合いを指してはいるが、決してある世代に特有の観念や価値観といったものではない。

しかしいまでも生涯学習とは「高齢者が生きがいを求めてあれこれ学ぶことだ」と考える人の多いことが指摘されている。¹⁵⁾ かつては職場や仕事をもつ現役世代にとって大事なものは何よりも仕事のための学習であるとか、生きがいなどは定年後に考えることだといった固定した職業観のようなものが存在した。だが生きがいは決して

高齢者だけに占有される心の働きではない。例えば最近の新聞のコラムには「仕事と離れた場で自分の生きがいを見いだしても構わないのだし、その生きがいを守るために、仕事に精出す生き方もある」¹⁶⁾と、悩む学生に助言した元就職担当の教員の言葉が載っていた。自立を果たし職場で懸命に働き続ける世代にとって、この言葉の意味するものは大きい。まずは現役世代に考えて欲しい問題だが、これから職に就く大学生にとっても十分に理解してもらいたい言葉といえる。

生きがいプランで大切なのは従来からある固定的な考え方も含めて、各人が自分に一番適した生き方はこれだと主張できるものを明確にもつことである。特に、何に生きがいを求めるか。趣味か仕事か家族か。趣味や家族だとしたら、その時間をどうやって確保するか。そもそも自分には趣味と呼べるものがあるか。余暇はどう考えればよいか、どのように過ごすべきか、自分は何に精神的な慰安を求めるか、など考えてみるべきことが多い。もし何か参考になる生き方があれば書きだし、参考にしたい書籍があればそれらも記録する。¹⁷⁾何かのために何かを我慢するというのではなく、そのために何かを犠牲にするというのではなく、正直に自分の夢や理想や希望などを全て書いてみる。働くために生きがいをもつのか、生きがいがあるから働くのか、そのどちらでもない働き方や生き方を望むのか、自立を果たした世代にはこうした問題に正面から立ち向かい、みずからの道を切りひらいてゆく勇氣と知恵と努力が求められる。

また生きがいとするものが仕事に関係のない場合は仕事や職業とのバランスをどうとるか検討し、それぞれの関係や優先順位などもあらかじめ定めておくが必要になる。常に心の平衡を保ちながら、仕事にも仕事以外のことに精を出すためにはこうした準備が欠かせない。仕事をきちんとこなしながら、仕事以外のことも大切に。その時々には紆余曲折や回り道や後戻りがあっても、長い目で見れば自分の道を着実に一步一步進んでゆけるように日頃から備えておく。思い通りには進まないのが人生であることを覚悟し、何があっても起こっても、これもまた我が人生なりと割り切って、過度に悲しまず、過度に喜ばず、淡々とやり過ごせるよう心がけておく。そんな生き方がこれからの時代には求められる。

自分のために誰かに迷惑をかけることがあってはならないし、誰かに負いぶしながら自分の希望を通すということも避けなければならない。これが成人後の世代に求められる真の自立である。生きがいプランはこのような理想を具現化するための設計図にほかならない。

4. 成人後の学習のためのプランづくり

(1) 学習の目的とテーマ探しに期待される視点

高校や大学を卒業した後の学習といえはすなわち職場研修を受けることだと考えられたり、積極的に職業教育を受講して専門的な資格を取得することだと理解された時代があった。そして日本もこれからは米国並みの資格社会に移行し職業資格の取得が就職や昇進に欠かせない条件になるとか、資格社会になれば明治から続く日本の学歴社会の弊害も解消されることになるなどと喧伝された。¹⁸⁾特に臨時教育審議会が「生涯学習体系への移行を主軸とする教育体系の総合的再編成」¹⁹⁾の意図を明確にした1980年代半ば以降、職業資格への過度な期待が産業界や教育界やマスメディアを賑わすことになった。

しかしこうした期待の多くは、日本の社会において職業資格と呼ばれるものがどのような意味をもつものか、職業資格と学歴の関係がどうなっているかなどを十分に吟味した上で広がったものではなかった。そのため当の臨時教育審議会も第3次答申において「基本的には、実力があれば、形式的な資格は必要ではなく、資格がなければ評価されないような、資格取得者による閉鎖的な社会になってはならない」²⁰⁾と、警鐘を鳴らさざるを得なかった。その後の日本企業の職業資格に対する対応振りを見ると、当時の期待や風潮がいかに一時的で無責任なものであったかがよく分かる。例えば日本経済団体連合会が毎年5～6月に実施している会員企業に対するアンケート調査を見ても、新入社員の「選考にあたって特に重視した点」(5つ選択)に保有資格を挙げた企業の割合は2012年が0.7%、2011年が1.3%という低さである。²¹⁾

従って成人後の学習の目的を就職や処遇改善など実利的な狭い範囲に止めるのは学生指導の面から見ても適切とは言えない。仮に職業資格に関連した学習であっても、資格の取得のみを目指すのではなく、そうした学習を

通じて職業観を高めたり職業人としての技能の向上を図るなど人間的な成長につなげてゆくための、より前向きな思考が求められる。仕事や職業に関係するものであっても資格という一つの面だけで考えるのではなく、視点を変えて歴史的に眺めてみるとか、海外事情に目を向けるとか、隣接の業種や分野からも眺めてみるなど日常的な実利の呪縛を解き放つ工夫が大切である。

一方、生きがい探しを目的とする学習は定年後の備えや老後の生活を充実させるための手段と見なされ、壮年期のサラリーマンには縁のないものと考えられてきた。しかし、今日ではさまざまな面からその意義が説かれるようになっている。背景にあるのは残業時間の長さや残業回数の多さであり、また四六時中仕事のことが頭を離れないという精神的拘束時間の問題も無視できない。生身の人間である以上、そうした状態を長く持続させておくことは困難である。肉体的にも精神的にも適度な休養が必要だし、ストレスが溜まらないようにする工夫も欠かせない。これが「仕事と生活の調和」であり、一般にはワークライフバランスと呼ばれるものである。壮年期における趣味の効用は、家族サービスと並ぶワークライフバランスの代表的なものといえる。²²⁾

休養や娯楽だけが目的なら学習は精神的負担の少ないものほど望ましい。一方、長い目で見れば長期にわたり継続できるもの、できれば現役を退いた後も続けられるものが理想といえる。仕事や職業に関連した学習は学生時代の就職活動や資格を取るための受験勉強に始まり、やがて定年を迎えることによって終了する。だが定年を迎えても人生の終点にはまだ20年もの余裕がある。現役時代の学習で得たものがその後の人生にも生きるような、生きないまでもどこかでつながるような、そんな中身やテーマが見つければ申し分ない。その意味でも現役時代の学習には技術の習得だけに止まらない人格を磨くという、より高い視点での目標が必要となる。²³⁾

もちろん定年後に備えて早い時期から稽古に精を出し、52歳で流派をたちあげ、90歳を過ぎてでも弟子に囲まれ現役で教えるといった人生も可能である。²⁴⁾ 早めに計画して準備に入れば、63歳で念願の農家レストランを開き、洗練された雑穀料理を供する、といったことも夢ではなくなる。²⁵⁾ だがそれには、いくら仕事大事でも、仕事だけの人生で終わらないようにするだけの夢をもつことが欠かせない。「仕事はどれほどのものかと思えるようになって、ようやく仕事を愉しめるようになった」²⁶⁾ という述懐も聞かれる。いずれにしても「気づいてみると、仕事をしてきて子育てもしてきた私のような女は、仕事関係の友達しかいない。趣味も少ない。学生時代の友人とも疎遠できてしまっている」²⁷⁾ といった人生では夢をもつことさえ難しい。

最近茨城県高萩市のように「生涯現役」をスローガンに、65歳を過ぎてでも「何らかの形で社会に参画し続け、いつまでも元気に過ごすことを目指す社会」²⁸⁾ をつくろうとする試みも始まっている。成人後の学習には既成の観念などにとらわれない柔軟な発想に加えて、こうした動きや試みに対する目配りも必要である。

(2) エンドレスな学習のためのプランづくり

学習を読書に限る必要は全くないが、それでも学習に占める読書の比重は相当に高いものがある。人格を磨く上で先覚の記したものと伝記から学ぶ点は少なくないし、相手が故人となれば書物に頼るしか方法がない。技術や知識を学ぶ場合、書物の比重はいっそう高くなる。まして思想だの思索だの哲学だのとなれば文字に頼るしかない。文学の場合も全く同様である。面倒でも一字一字読み進め、行間を丹念に読み解いてゆくしかない。映画やドラマになったものを鑑賞する手もあるが、それでは脚本家や監督や演出家の目を借りて眺めるに過ぎない。やはり時間がかかっても、じっくりと原作で味わうことに挑戦したい。

だから源氏物語を何度も読み返すという目標があってよいし、誰々の現代語訳を読み比べるということも目標になる。それに読書の対象は古典文学だけではない。文学以外にも手近な歴史や地誌だけ見ても、読み切れないほどの名著が揃っている。著者から入るもよし、テーマで選ぶもよし、名著や古典と呼ばれるものだけを拾ってみても数が多すぎて、生涯かけても読み切れない。こうした作品を誰もが気軽に読めるようにとつくられたものが図書館である。昔、教科書で読んだ作品を思い返して読み始めるのも一つの方法だし、専攻した分野の古典をなるべく原書や原典で読むということも目標になる。こうしたことを着実に進めるのが学習プランづくりである。そのためには目標が必要であり、今の自分に何が足りないかをじっくり考えるところから始めたい。

文字を読むのが苦手な人には講演会を聴くという方法もある。入場料は決して安くないが、それでも講演には書物では知ることのできない面白さがある。書物と講演の差はいわゆる脱線にあって、人生の貴重な示唆を得る

ことも少なくない。日本に Lengrand の “l'education permanente” を紹介した心理学者の波多野完治は、この点について「一見ムダだと思われるような挿話をくみこみ、あとで考えると、それが立派な具体例になっていた、というのが、名講義の特長だ」²⁹⁾と述べている。講義でさえそうなのだから、講演の場合はいっそうこうした特長が際だってくる。

趣味についての学習では、もっと寄り道や回り道や道草を増やすことができる。この寄り道や回り道や道草が人生をより豊かにしてくれる。映画を観るにしても音楽を聴くにしても、少しずつ趣味の度合いが深まってゆく。こういう姿勢で臨むのが理想的である。映画であれば同じシリーズを全て観るとか、好きな主演俳優の出演作品を次々に観てゆくというのはよく耳にするが、さらに進めて対象を監督や脚本家にも広げるとか、テーマや時代を絞って各国の映画を観るなど多くの方針・プランが考えられる。

どのプランにするか決めるためには、それなりの調査や学習もしなければならない。そうする中で例えば “Mr. Smith goes to Washington.”³⁰⁾に出逢って、そこから政治とマスコミの関心に興味を抱いたり、不撓不屈の意味について考える機会が生まれ、さらに次の作品の発掘や学習へとつながってゆく。“12 angry men.”³¹⁾に出逢えば裁判員裁判や刑事裁判について改めて知る契機となり、「疑わしきは罰せず」の真の意味を知りたくもなる。こうして最初の糸口が手近なものであっても徐々にその範囲や対象は広がってゆく。そして観たいもの、聴きたい曲、聴きたい演奏家やアーティストが増えてゆく。これが趣味の学習の面白さである。

難しいテーマを選ばなくても、身近な嗜好品などから入る方法もある。例えば日本酒の好きな人だったら自分の舌で選んだ銘柄がどのようなルートで販売されているか卸売店に聞いてみるとか蔵元を訪ねて質問してみる。卸売店や蔵元を訪ね歩けば、いろいろな耳学問ができる。これも立派な学習である。旅行もできるし、心の休息にもなる。行く先々に普段の仕事では味わうことのできない世界があるし、そうした中で耳にしたことが仕事の遂行に役立つことだってないとは言えない。こうしたことに挑戦してゆけば、ことさらに意識しなくても往事の酒蔵の姿を写真に記録したり、絵心があればスケッチに残そうという気にもなる。自分でも日本酒の歴史を調べてみようとか、地酒の役割を調べてみよう、日本の酒文化について考えてみよう、と気持ちが前向きになってゆく。そして新たな日本酒論に結実したり、³²⁾記録性の高い画集となって、人生をさらに充実させてくれる。³³⁾

そこまでのめり込むことはなくても、世の中にはさまざまな人がいて職業生活と余暇を利用した趣味生活とを両立させていることを知れば、仕事を離れて行なう学習の意義や幅や範囲の広さを知ることができる。学習の機会に至るところに転がっているものであり、そのためには学習用のメディアや方法を多彩にすることは当然だが、人と出会う機会を増やすことも、その前提としての健康維持も欠かせないことに気づかされる。地域性が薄れてゆく時代だからこそ地域社会への貢献も忘れてはならないし、地球という星の明日も気になってくる。それらがみな自分らしい生き方を模索し、人生をよりよく前向きに生きようとする目標へとつながってゆくのである。

5. おわりに

本稿を執筆して最も強く感じるのは人生 80 年が当たり前となった時代において、そのうちの半分も占めるかどうかという職業人としての人生に血道を上げることの滑稽さである。特に会社人間などと呼ばれ職場としての勤務先以外に家族のことも自分の健康さえも顧みることなく過ごしてしまった人々の、残りの人生の過ごし方が気になる。20 年という時間は余生と呼ぶには長すぎる。そのことを当事者は考えることなく、知らされることなく懸命に走り続けた。経済的には自立していても情報的には自立していなかった、と言わざるを得ない。

日本の現在はそのような人々の汗によって築かれ支えられてきた。そういう見方もできよう。だが還暦を迎え文字通り一から出直さなければならなくなった人々の戸惑いも精神的な苦労も放置されたままである。生涯学習センターと呼ばれて久しい旧公民館のロビーや無料開放から 60 年余になる公立図書館の閲覧室には職場を定年で退職した大勢の団塊の世代が押し寄せ賑わっている。しかし、そうした人々に定年後の居場所を提供するだけが生涯学習施設の役目であろうか。そうなる前に「もっと別の生き方のあること」「そうした生き方を選ぶことが決して勤務先を蔑ろにすることでも、日本経済に背を向けることでもない」と伝える役目こそが公的学習施設本来の機能であり、生涯学習論の責務ではないだろうか。

こんなバランスの悪い人生を若い世代に繰り返させてはならない。そのように努めることも優れて教育の守備範囲である。家庭教育や学校教育を含む新たな生涯学習システムの構築が待ち望まれる。

【注】

- 1) 『大辞林 第3版』三省堂 2006.10 p400
- 2) 例えば朝比奈大作は“学習者としての図書館員”と題して「生涯学習という理想が、すべての人々がその一生を通じて学習活動を継続していくこと、すべての人々に生涯を通じての学習機会を保障していくことだとするならば、その理想の実現に向けて、図書館員自らが〈生涯学習〉を実践していくことが求められよう」と述べている。（『図書館員のための生涯学習概論』日本図書館協会 1998.1 p137）
- 3) この背景には、例えば李正連“日本の生涯学習政策の現状と課題”『生涯学習・キャリア教育研究』第2号 2006.3 p21 が指摘するような現行の生涯学習政策に対する厳しい批判の影響も考えられる。
- 4) LIPER 報告書 更新：2006-01-23 この報告書では司書を「情報専門職（公共図書館）」と称している。[<http://www.jslis.jp/liper/report06/report.htm> accessed = 2012.10.10]
- 5) 同上
- 6) 堀薫夫『生涯発達と生涯学習』ミネルヴァ書房 2010.2 p123
- 7) 市川昭午、天野郁夫『生涯学習の時代—激動の現代を生き抜くために』有斐閣 1982.11 257,5p（有斐閣選書）のジャケットには「生涯にわたって学習をつづけることは現代人が今日の競争社会を生き抜くための必須の条件である」と記している。
- 8) 福島大学入試情報 [http://nyushi.adb.fukushima-u.ac.jp/zyokyo/24/2_toku.html accessed = 2012.10.10]
- 9) 柴野昌山“生涯学習計画の理論”『京都大学教育学部紀要』第40号 1994.3 p2
- 10) 名古屋市立大学医学部産科婦人科教授の杉浦真弓は「卵子の老化と妊娠適齢期」の問題について『東京新聞』夕刊一面の連載コラム「紙つぶて」の中で警告を発し続けた。例えば2012.6.11掲載の“いのち短し恋せよ乙女”など。
- 11) 医師法（昭和23年7月30日法律第201号、最終改正：平成19年6月27日法律第96号）には第4章として第17条以下第24条まで、医業に関するさまざまな義務事項が定められている。
- 12) 文部科学省「平成24年度学校基本調査（速報値）の公表について」2012.8.27 [http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1324976_01.pdf accessed = 2012.10.10]
- 13) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）編『劣化する戦後写真 写真の資料化と保存活用』岩田書院 2009.12 133p（岩田書院ブックレット15）
- 14) 前掲1)『大辞林』第3版 p118 は、この二つの微妙な差を区別せずに同一語義として示す。
- 15) 讃岐幸治、住岡英毅 編著『生涯学習社会』京都 ミネルヴァ書房 2001.4 pi（MINERVA 教職講座17）
- 16) 山本幸司“就活への感想”『東京新聞』2012.10.1 夕刊 p1 著者は静岡文化芸術大学名誉教授。
- 17) 例えば矢口高雄『ボクの学校は山と川』白水社 1987.9 226p は、本稿のようなテーマを考える際に多くの示唆を与えてくれる。漫画家に憧れる学生は少なくないが、小説家との違いを知る上でも参考になるし、教員を目指す学生には教育とは何かという大きな問題について考えさせてくれる。また近年、増加の傾向が著しい農業や自然に憧れる学生たち、晩年のプランに農業や土との関わりを考える学生たちに対しても、自然のもつ根本的な意味を教えてくれる。
- 18) 高梨昌『臨教審と生涯学習—職業能力開発をどうすすめるか』エイデル研究所 1987.7 p63
- 19) 臨時教育審議会『教育改革に関する第四次答申：最終答申』大蔵省印刷局 1987.8 73p [http://nyc.niye.go.jp/youth/book2003/html/04/04_04_01.htm accessed = 2012.10.10]
- 20) 臨時教育審議会『教育改革に関する第三次答申』大蔵省印刷局 1987.4 p8
- 21) 日本経済団体連合会“新卒採用（2012年4月入社対象）に関するアンケート調査結果”2012年7月30日 [http://www.keidanren.or.jp/policy/2012/058_kekka.pdf accessed = 2012.10.10]
- 22) ハリー A.ヒル“仕事と生活の調和”『東京新聞』2012.10.24 夕刊 p1
- 23) 杉山由美子『大人のためのお稽古ごと入門』岩波書店 2007.3 px 田辺聖子の言葉として紹介する。
- 24) 同上 p52-63
- 25) 同上 p146-157
- 26) 同上 pxi
- 27) 同上 px-xi

- 28) 草間吉夫 “生涯現役 高齢者の自立 財政も健康に (談論誘発)” 『東京新聞』 2012.8.28 p23
- 29) 波多野完治 『生涯教育新講』 教育開発研究所 1975.6 p10
- 30) 邦題「スミス都へゆく」 米国・コロムビア映画 公開:1939.10.17 監督・制作:Frank Capra 脚本:Sidney Buchman 原作:Lewis R. Foster
- 31) 邦題「12 人の怒れる男」 米国・Metro-Goldwyn-Mayer & United Artists 配給 公開:1957.4.13 監督:Sidney Lumet 制作:Henry Fonda 脚本:Reginald Rose
- 32) 古川修 『世界一旨い日本酒 熟成と爛で飲む本物の酒』 光文社 2005.6 228p (光文社新書) は元・本田技研工業の技術者による日本酒論。本業のかたわら趣味で探し求めた旨い酒へのこだわりが執筆の動機になっている。
- 33) 加藤忠一 『淡彩スケッチで描く関東の酒蔵二百十七景』 相模原ギャラリーバスタイム 2011.5 72p (自費出版) には、1 都 6 県の酒蔵 217 棟の風景が記録されている。著者は日本酒の熱燗が好きな元・新日本製鐵の技術者。一升瓶の王冠を集めたり、各地の酒蔵を訪ね歩いてスケッチを楽しんでいる。